

学びを支える図書館

～アクティブラーニングの視点から～

1 発表の要旨

『「学び方の学び」を支援する ～教科「情報」との連携～』 上條浩教諭・清水満里子司書（長野県諏訪清陵高校）

2012年より上條教諭の「情報地理」での探究学習が始まる。現在は「社会と情報」という科目名となり、「学び方の学び」を履修目標の一つとして探究的な学習を展開している。

図書館オリエンテーションで最初からプレゼンテーションをさせて問題を提起する練習を開始し、グループ学習、グループでのプレゼンテーション、個人のレポート作成、個人でのプレゼンテーションを経て評価まで、一連の流れとして3年間で学習する。テーマの設定が大事なので、マッピング等を使ってテーマの探し方、問の作り方をしっかりやっている。

2014年には県のICT活用モデル校となり、探究学習の流れでタブレット端末が図書館に置かれることとなる。



1人1台ずつ端末を持ち、情報収集からプレゼンまで、全て図書館で行えるようになった。前述のマッピングの機能もあり、タブレット端末は図書館にとって有効な道具となっている。

探究学習には生徒と先生がしっかり話せること、司書の存在、TT(複数)でやるのが重要で、気軽に使える図書館の利用価値は上がっている。

『魅力的な図書館を目指した、レイアウトや展示の工夫』加藤美恵司書（新潟県立豊栄高校）

図書館に足を運んでもらうことを大きな目標とし、環境づくりに力を入れている。

生徒にとっての「魅力的な図書館」とは、を考えた時にできることはいろいろあるが、まずは図書館に来てもらうことを第一に考え、二つの実践をした。

一つ目は「図書館の存在をアピール」すること。いつでも気軽に利用でき、役に立つことを知ってもらうために、①新入生図書館オリエンテーションの実施 ②広報紙の発行 ③掲示板づくりを行った。広報紙は司書が作成するものと生徒が作成するものがある。

二つ目は「図書館の環境づくり」。①利用しやすいレイアウトへの変更 ②わかりやすい表示、見出しの作成 ③本を手にとってもらうための展示、コーナーづくりを行った。表示には「にもあり」表示で類書に誘導できるシステムを作成した。展示はマンネリ化しないよう注意し、小物も工夫した。職員には好評で利用も増えている。また、展示された本は貸出されなくても手に取って見られている。



図書館の利用のされ方は学年によっても変わってくるため、3年間通しての長期的展望を持っていたい。

『学びを支える図書館 ～上市高校図書館の1年より～』水上令子教諭（富山県立上市高校）

・意欲的な読書活動 ・より良い読書環境づくり ・教育課程の展開の充実 を目標に運営している。図書館は別棟にあり、生徒の貸出数も一人当たり1.7冊と少ないため、利用拡大に取り組んでいる。



図書館オリエンテーションは新入生と、課題研究のある3年生に実施する。特に3年生には講座ごと、記録の仕方やコピー

&ペーストの問題点などを説明する。

意欲的な読書に向け、朝読書(毎日10分)実施している。「静かに読む」ために、係職員は「朝読

の時間」「着席」等と書かれたプラカードで声を出さずに指示することになっている。また、年に2回、図書委員が書店に出かけて本の選定もする。事前にどんな本を入れてほしいか、全校に希望を取っている。

年2回の教養講座の後半には「*まなボード」を使用した。「まなボード」は20枚用意し、発表に使った。校内で誰でも自由に利用できる。

授業での図書館利用は課題研究が優先され、資料収集、提供を行っている。

*「まなボード」 ホワイトボード&ペンのセット 校長先生が用意してくれたとのこと

『図書館の活性化をめざして ～図書委員と共にイベント活動に取り組む～』 浦川幸子司書(石川県立田鶴浜高校)・谷内篤子司書(石川県立七尾高校)

石川県南能登地区では、図書室の活性化を目指し、また、生徒の自主性を育むために、図書委員と共にイベント活動に取り組んでいる。

主な取り組みは (1)POPづくり (2)朗読 (3)その他 と分かれる。



《朗読の実際の様子を動画で見る。》

七尾高校のアトリウムコンサートは図書委員の朗読と吹奏楽部の演奏のコラボレーションによるもので、皆が良く知っているお話と音楽を扱うこと、また、図書館の外に出ること、多くの生徒を巻き込むことで活動を多様にし、活性化を目指している。

《放送による読書案内を聞く》

放送で紹介された本は展示し、話題づくりができる。教室は賑やかなので聞こえないこともあるが、生徒は割と聞いている。職員に好評である。

また、その他の活動として、七夕イベントをしたり、俳句をつくったりと、活性化のためのイベ

ントを工夫している。

生徒はイベントを通じ、本に親しむことができるようになる。また、学校同士連携した活動することにより、広がりも出てくる。

2 協議内容

・清陵高の情報以外での活用に関しては、高校はあまりない。中学だと様々な調べ学習に使われる。
・中高一貫校で、中学からの入学者と高校からの入学者では、本を読むこと自体にあまり差はない。調べ学習に関してはやはり中学からの入学者の方がスキルが高いが、問題なくできるようになる。
・このような学びをしていけば、テーマに関わらず大学でもやっていけそうである。



・自治体により司書の配置に差があることに気付いた。学校司書がない隙間を図書委員が埋め、頑張っている。

・アクティブラーニングには学校司書が必要だ。
・調べもので図書館に生徒が行く場合、教員は教室(授業)から抜け出せないで、生徒だけが図書館に行くことになってしまう。

・清陵高はTTが必要な場合は空いた職員が入り、40人に3人(内一人が司書)体制になるようにしている。

・長野県ではハードが先行している感がある。
・富山県はここ2、3年でICT設備が整ってくるのでこれから研究する。

・石川県はICT設備は学校ごとの対応で入りつつある。使ってみよう、という段階だ。県の支援がほしい。



・前年度のマネをしていくことになるので、人が変わった時どう対応するか、できるかが問題だ。

◎ICT教育も探究的な学びもアクティブラーニングも、誰でもできるようになり、新しい形の図書館になっていくのが理想である。